慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	限界効用説雑考
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.11 (1920. 11) ,p.1503(1)- 1522(20)
JaLC DOI	10.14991/001.19201101-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮内省御用達
東洋軒主 伊藤耕之進
東洋軒本店 芝二、〇八七
同 芝一、四三七
五、九八五
新橋驛樓上 東洋軒支店 電話新二、七二八
日本橋橋畔村井ビルデング地下室 東洋軒支店 電話本局二、五五四
同 二、四八四
有樂座内 東洋軒支店 電話本局三、七二四
帝國劇場内 東洋軒出張店 電話本局三、二八三
日本橋濱町（大阪料理） 錦水 電浪 二、七三九

三田學會雜誌 第十四卷 第十一號

論說

限界效用說雜考

三邊金藏

一

墺太利學派が主觀的價値を定義して「主觀的價値とは一經濟主體が其幸福進捗の點より一個の財若くは財の複合體に附する重要なり」と謂ひ、從つて主觀的價値の大小は此重要の度合に外ならずとなせるは、誠に事の肯綮に中れるものにして吾人の私かに推重するところなれども、併し彼等の或者が更に進みて、一定數の單位量より成る同種の財の一集團の有する價値の大さは、是に依りて滿足せらるゝ

慾望中の最下位に屬する慾望滿足が其主體に對して有する重要――財の側に移して之を言へば其所謂限界效用――に乘ずるに、當該單位量の數を以てしたるものなりと說く其主張には、遽かに贊成の意を表し難きのみならず、更に忌憚なく之を評すれば、遠く正鵠を失せる一個の空言なりと謂はざる可からざるものなりと信ず。而も彼等の此主張は彼等の他の幾多の主張の基石たるものにして、此點に於ける錯誤は他の點に於ける錯誤となりて現はるるの實あるが故に、以下先づ此點に於ける誤謬を指摘して然る後に其が如何なる點に如何なる影響を與ふるやを述べんと欲す。

二

却說吾人が上に墺太利學派中の或者の主張と謂へるものは、フリイドリッヒ・フォン・ヴィザーの「自然的價値論」中の一節に最も簡明に言ひ表されあるが故に、先づ左に之を譯出することとす可し。

「一人の貧者ありて日々二塊の麵麭を得、然かも積極的饑餓の苦痛を緩和せんが爲めには其一つにて足ると假定せば、二塊の麵麭の一つは果して幾何の價値を彼に對して有するであらうか。例へば若し全く何物をも有せざる猶は一層貧き人ありて一塊を彼に乞ひたりとせば、彼は此要求に應ずるに因りて果して如何なる犧牲をなすことゝなるであらうか。若しくは――同じ事に歸着するが――假りに彼が此要求に應ずるを拒むとせば、彼は果して如何なる用。又は效用を保有することゝなるであらうか。答は至つて容易である。若し彼にして其一塊の麵麭を與へ去るとせば、彼は積極的饑餓の緩和せられたる時に於て猶ほ感じて居る慾望の強度に對する準備を喪失す可く、而して若し彼にして之を保有するとせば彼は即ち此準備を保有するであらう。吾々は此慾望の強度を第二位と呼ぶであらう。

然れば二個の全く相等しき財の一つの價値は其特定せる財の彙類の有する效用階段中の第二位に等しいのである。三個の財の一つは同じ事情の下に於ては第三位に等しき價値を有し、四個の財の一つは第四位に等しき價値を有するであらう。約言すれば同じ種類の財の一集團中の何れかの一財は一般に最後效用若くは限界效用に等しき價値を有するであらう。××××。

乍併是れ丈けでは未だ十分ではない。二個の財の一つが第二位の效用に等し

き價値を有するに止らずして、何れを擇りて之を見るも、彼等の何れもが此を有するのである。前の例に於ては、二塊の麵麭が兩ながら彼の所有裡に存する間は彼は決して斯の如き窮迫に曝露せられぬであらうが故に、二塊の麵麭の何れもが――所有者が兩者を有する間は――積極的飢餓の緩和なるものに屬する價値を有せぬであらう。彼は餓死に對する自己の準備を喪失することなくして――他の一つを自己に保有する限りは、何れなりとも自己の好む所に從ひて――二塊中の一つを與へ去ることが出來る。乍併二塊中の何れもが第二位の效用に等しき價値を有すとせば、二者は合せて此價値の二倍を有すであらう。而して三個は合せて第三位の效用に等しき價値の三倍を有し、四個は第四位の效用に等しき價値の四倍を有す。一言にして之を盡せば、同種の財の一供給額の有する價値は單位量の數に乘ずるに限界效用を以てしたる積に等しいのである。

一百萬石より成る收穫が不足にして社會を擧りて、消費行爲が一〇なる數字に等しき滿足を生ずるにあらざれば其穀類を消費するを敢てす可からずと云ふ程其使用を節約せざる可からずとせば、其收穫の價値は1,000,000×10なりとして計算せらるゝであらう。收穫が二百萬石にして、消費行爲が例へば四なる滿足を必要とするのみに止まる場合には、其收穫の價値は2,000,000×4に等しい。限界效用が一なる場合に於ける一百萬噸の鐵の價値は1,000,000にして、五〇の限界效用を有する一〇〇、〇〇〇オンスの金の價値は5,000,000である」。

× × × × × × ×

「上述の價値の法則は其存立を一方に於ては慾望階段の特殊なる形成に負ふものであるが、併し他方に於ては財の所有せらるゝ特殊なる條件に之を負ふものである。然れば若し財が同種の單位量より成る集團若くは供給額として來らずして、個々に而して又た各が異れる形態にて來るとせば、此法則は妥當せぬであらう。乍併、斯の如き集團の出現する處に於ては、其は必ず妥當する。全く同じ種類の事物が異れる評價を受くるが如きこと如何にしてあり得可きぞ――勿論其が同一人に所屬し且つ同一需用を滿足するの用に供せらるゝものと想像して。×××」。

（英譯本二四―二六頁）

即ちウイザー氏は、同種の財の幾つかが一個の集團として存在する場合に於て、

は、其何れかの一つが限界效用に等しき價値を有するのみならず、其何れもが是に等しき價値を有するが故に、其集團全體の價値は其集團を形つくる財の數に其限界效用を乘じたるものならざる可からずと主張するものにして、卒然として其所言を聞けば誠に當を得たるものなるかの如き觀を呈すれども、併し斯の如きは、氏自らの言明するが如く(Natural value 二六頁の註を見よ)ゴッセンもジェボンスもワルラも――而して吾人の見る所を以てすればメンガーも――共に說かざりし所にして、實に又た明白なる誤謬に屬すと謂はざる可からざるものなりと信ず。蓋しウィザー氏の此主張は「二塊の麵麭が兩ながら彼の所有裡に存する間は彼は決して斯の如き窮迫に曝露せられぬであらうが故に、二塊の麵麭の何れもが――所有者が兩者を有する間は――積極的飢餓の緩和なるものに屬する價値を有せぬであらう」と云ふ根柢の上に立つものなれども、併し彼の貧者が斯の如き場合に於て斯の如き窮迫に曝露せらるゝことなきは、其所有する二塊の麵麭の何れかの一つが所謂「積極的飢餓の緩和」なる效用を致しつゝあるが爲めにして、何れかの他の一つが第二位の慾望滿足なる效用に就き得るも實に亦た此保證あるが爲めに外ならずと謂ふ可きなれば、其何れかの一つには常に第一位の慾望滿足なるもの依賴しつゝありと謂はざる可からざる道理にして、兩者の何れの一つにも之を拒まんとするは、決して正當なる論理の許容する所にあらざればなり。同種の財の一集團中の何れかの一財は、一般に限界效用に等しき價値を有すと謂ふ、限界效用論者普通の所說に關聯せしめて更に之を言へば、此一般的命題が其眞たるを失はざるは其が常に數者中の何れかの一つを擇り其一つの價値を問題とするが爲め、換言すれば其が他の半面に於て爾餘の財がより高き慾望滿足の用を效しつゝありて、從つてより高き價値を有しつゝありと思考するを妨げざるが爲めなるに、今ウィザー氏は悉く此暗默の前提若くは約束を無視して、其何れにもより高き慾望滿足に基くより高き價値を認めざらんとする其反對に、其何れにも限界效用に等しき價値を認めんとするものなるが故に、其主張は到底眞たるを得ざるものなりと謂はざる可からざるなり。

斯く言はゞウィザー氏に黨する者は或は曰ん、夫れ然り、然れども其は財が同種の單位量より成る一集團若くは一供給額として來らずして個々に來るものとし

て思考するが爲めに外ならず、然かも斯の如きはウィザー氏が其價値の法則を立せんとせる財所有の條件にあらず、否ウィザー氏は斯の如き場合に於ては自己の價値法則は妥當せざる可しと明言し居るものにして、其次第は汝の先に引用せる同氏の言の末尾に判然明記し在る處なり、ウィザー氏は財が同種の單位量より成る一集團若くは一供給額として現はるゝ場合に就きて其價値法則を説くものなれば、同氏の此立場を察せずして妄りに其説を上下せんとするは不正當にして又た不謹慎なりと謂はざる可からずと。

乍併吾人は此反駁論の前に白旗を揭げて直ちに自己の論陣を撤することを肯せざるものなり。何となれば、(第一)「財が同種の單位量より成る一集團若くは一供給額として現る」との意を極めて嚴密に解して、不可分的に結合せる一個の全體の謂ひに外ならずとせんか、然らば其は第一位の慾望滿足に向ひ得るのみにして、同時に第二位の慾望滿足に向ひ得るが如きことは勿論有り得可からざるが故に、其は第一位の慾望滿足に等しき唯一の效用と價値とを有し得るのみ。從つて其價値に就きて或は總和ならざる可からずと謂ひ、或は乘積ならざる可からずと謂ひて互に相爭ふは總て無用の詮議に了るを見る可ければなり。而して(第二)に、若し彼の語の意味する所が然かく嚴密ならずして、個々の單位量に分ちて考察することをげ妨ざるものなりとせんか、然らば各個の單位量が同時に同一位の慾望滿足に向ひ得ざるは蓋し自明の道理なるを以て、所詮は吾人の上に述べたるが如く思考せざるを得ざる次第たるを發見す可きにして、吾人はウィザー氏が「彼は餓死に對する自己の準備を喪失することなくして二塊中の一つを與へ去ることが出來る」と謂ふに滿足せんと欲して然かも自ら甘ずる能はず、故(コトサ)らに「他の一つを自己に保有する限りは何れなりとも自己の好む所に從ひて」と云ふ一句を其間に點綴するの必要を見たる事實の裡に、此論理必然の約束の如何に背き難きかを最も鮮やかに語る一個の證跡を認め得可ければなり。

然ればウィザー氏の擧げたる例の如きに於ては、二個の財の何れかの一つは第一位の效用に等しき價値を有し他の一つは第二位の效用に等しき價値を有す、從つて二個は合せて其和に等しき價値を有す――以下之を「總和説」と略稱す――と謂ざる可からずして、決して其何れもが限界效用に等しき價値を有す、故に二個は

合せて其二倍に等しき價値を有す――以下「相乘說」と略稱す――と謂ふ可きにあらざるなり。而して此は一般に推し及して之を言ふも亦た違ふ所なきが故に、ウィザー氏が「同種の財の一供給額の有する價値は、單位量の數に乘ずるに限界效用を以てしたる積に等しいのである」と謂ふも亦た誤れりと斷せざるを得ざるものたるなり。

乍併、同種の財の各單位量が同じ價格にて賣買せらるゝは、吾人の日常見聞する實際の事實にして、而してウィザー氏が「壹百萬石より成る收穫が不足にして社會を擧りて、消費行爲が一〇なる數字に等しき滿足を生ずるにあらざれば、其穀類を消費するを敢てす可からずと云ふ程其使用を節約せざる可からずとせば、其收穫の價値は1,000,000×10なりとして計算せらるゝであらう云々」と謂ふ其例解は、恰かも此事實を說明するに足るものなるかの如き觀を呈するを以て、世人或は此點より吾人叙上の議論に疑惑の眼を向けんかなれば、此點に關しても亦た豫め一言を費し置くを萬全の策なりとして、先づ第一に言はんと欲するは、彼の如き事實は客觀的交換價値に關する一事象にして、ウィザー氏の此言は主觀的使用價値に關するものなれば、彼の事實を採り來つて此言の脚註となさんとするは、彼此の混同を顧みざるものにして決して穩當なる處置と謂ひ得可からざる點なりとす。次に第二に言はんと欲するは、ウィザー氏の此言は、一定の時に於ける同一人の評價に關せずして社會各員の夫れに關するが故に、同一人の主觀的使用價値に關する吾人當面の問題とは殆んど全く沒交渉なること之なりとす。即ち何れも吾人にとりては、ウィザー氏の此例解が例解たるの用をなさゞるを語る好個の理由を形つくるものにして、吾人は實にウィザー氏が何故斯の如き混同を敢てせるやを怪まざるを得ざる者たるなり。

以上說く所に依りて吾人はウィザー氏の「相乘說」を稍詳細に檢覈し、自らは「總和說」に傾く者なるを讀者の前に明にせり。然れども吾人の下に論ずる所は、悉く此點に於ける見解の相違より生ずるものに外ならずして、其當否一切は總て此要目に歸着するを見る次第なれば、吾人の所謂總和說が決して吾人の一家言たるに止らざるの實を明にして、更に自己の陣營を固め置くは、強ち無用の業にあらざる可しとして今ベヤム・バウヱルク氏の所論を此處に援用し來れば、其は即ち次の如く

なりとす。

「却說斯る場合に於ては一見極めて不可思議なる觀を呈すれども、併し精細に之を考察すれば全く自然の道理たるを悟了し得る現象、時に發生し得るであらう。詳言すれば、財の多量が法外に高く評價せらるゝが故に、財の多量の價値が同種の財の單位量の評價と調和せざること生起し得るであらう。例へば五囊の穀物は、或事情の下に於ては、一囊の五倍に評價せられずして十倍にも百倍にも評價せらるゝのである。而かも此は單一的に評價せらるゝ大なる分量が、處分せられ得可き全量中の著大なる部分を形つくり、其喪失が評價主體の慾望滿足に甚大なる影響を及ぼし、具象的慾望より最後のものに比し著しく重要なる滿足を奪ふが如き場合には常に見る所であらう。斯る場合には、單一的に評價せらるゝ財の量額に依りて滿足せらるゝ（慾望の）最低層は、其自身更に不等なる標高を有し、重要を異にせる具象的慾望を包有するが故に、其等しからざる組成分の幾つかの合計は、（財の單位量の價値を決定する）最後最小の組成分に組成分の數を乘じて得る乘積よりも大でなければならぬ。5+4+3+2+1 は必ず 5×1 よりも大である。此を猶ほ一層明瞭に理解せんが爲め前に述べたる移住民の例に戻つて見る。一囊の穀物は、五囊が所有せらるゝ狀態の下に於ては、鶏鶏を飼ふ樂み丈けの價値であつた。乍併五囊全部を合せたるものに依賴し居るは、決して其何れもが鶏鶏を飼ふ樂みと大さを等しふする幾つかの滿足の合計に止らずして、[illegible]（即ち鶏鶏飼育の樂みの五倍大ではなくして、無際限により大なる合計額である。×××××。（經濟的價値論の綱要―國民經濟及統計年報、新第十三卷三四―三五頁）

三

却說以上吾人の說く所にして若し幸に大過なきを得たるものならとせんか、然らば其は又た自からバンタレオニ氏の所謂「ウィザーの法則」なるものを排除するの結果を生むと謂はざる可からずと信ず。蓋し所謂「ウィザーの法則」とは、費用價値說は限界效用說の一應用面に外ならずと主張するウィザー氏の說を指稱せるものにして、其議論の要旨は左に引用する所に就きて略ぼ之を察知し得る所の如くなるが、ウィザー氏の此主張は、彼の「相乘說」を生めると同じ誤謬の上に其根柢を

置くものなるが故に「相乘說」を排する吾人叙上の議論は、即ち又た應て此新たなる主張を排し得るものならざる可からざる道理たればなり。

「（各種の用途を有する）生産財は常に可及的最大なる慾望滿足を確保する是等生産物を齎すが如き用途に使用せられねばならぬ。特に個々の生産部門に生産財を割り當つるに際しては――同一事を說くに他の語を以てすれば、生産せらる可き財の種類と量額とを撰定し、個々の生産部門に勞働と資本とを投用するに際しては――常に可及的最大なる慾望滿足の爲めに準備するを目的として審議し決定せられねばならぬ。乍併此は毫も是等生産物は何處に於ても同じ限界效用を有せねばならぬとの意味を含蓄するものではない。×××。然れば異れる生産部門に於ける限界效用が互に相異るを見るは往々にして生ずる事實なる可く、而して多種多樣の用途に供せられ得る一切の生産手段の場合に於ては常に見る事實であるであらう」。

「例へば一團の鐵よりA・B・Cなる三種の生産物作り出さるゝとし、Aなる種類に於ては鐵の單位量は――經濟的に享受し得る一〇なる限界效用に準じて――一〇なる價値を得、Bなる種類に於ては――九なる限界效用に準じて――九なる價値を得、Cなる種類に於ては――八なる限界效用に準じて――八なる價値を得とせよ。是は即ち效用が、生産物の階段に於て、未だ完全に限界的水準に適合するに至らず、而して均等化は直接に、而も生産財の階段に於て先づ生起せざる可からざる場合あるを吾人に示すものである。（而も）均等化が結局生ぜざる可からざるは疑ひ得可きでない。鐵の三分の一が他の三分の一より高く評價せらるゝが如きことは全く在り得ない。實際、總てが同一品質なりとせば、其一團中の何れの特定部分が爾餘の部分に優れるかを決定す可き方法なるものは全く在り得ぬであらう。其鐵の、注意に値する程の幾何量かゞ、八なる限界效用を有する生産物を作り出す目的に向けられ居る限りは、全體中の何れの單位量もがより高き收益にて評價せられ得ぬのである。斯る場合に於ては、各單位量には八なる限界收益が歸せられねばならぬ、而して全部の價値は、全部中に包有せらるゝ單位量の數に限界價値八を乘ずるに依りて見出さる。（自然價値論九八――九九頁）。

「此は限界（效用）法則」の最も多效なる應用の一つである。自分は以下特に費用に

關する主題を論ずる第五卷に於て再三再四是に復歸するであらう。費用に關する法則の理解に便せんが爲め、自分は此所では豫め生産的限界價値は生産物の價値の上に平準化的影響を有すと云ふこと丈けを述べて置く。上の例に於てはAなる種類及Bなる種類に於ける一〇なる限界效用及九なる限界效用に準ずる夫れ〳〵の價値は、彼此共に八なる生産的限界(效用)額に壓下せらるゝであらう」。(同上脚註)

今バンタレオニ氏に倣ひて、一面に於てウィザー氏の此言を簡約すると共に、他面に於ては缺けたる論理の鏈環を補ひ、斯くてウィザー氏の主張する所と吾人の非難の向ふ所とを更に一層讀者の前に明瞭ならしめんならば、ウィザー氏は「幾多の用途に供せられ得る生産財は之より生産せらるゝ生産物の有する最低價値より其價値を受くるものなり――此最低價値は生産財の悉皆の單位量に一樣に附着するものなり。上記の例に就て之を言へばA・B・Cなる三種の生産物を齎す生産財たる一團の鐵の各單位量はCなる生産物の有する八なる價値を受くるものなり。然るに今生産財は、生産の當初以前に之に附せられたる價値を、生産の完了せる後に於ても猶ほ保有するの常なり――換言すれば其が生産物となれる後に於ても猶ほ之を保有するものなり。再び上記の例に就て之を言へばCなる生産物より八なる價値を得たる鐵の各單位量は、此價値を其がA・B・Cなる生産物となりたる後に於ても猶ほ保有するものなり。故に此例の如き場合に於ては、一〇なる價値を有するAなる生産物も、九なる價値を有するBなる生産物も、所詮はCなる生産物の有する八なる價値に壓下せられて之に等しくならざる可からず。普通に費用價値説と稱せらるゝものは即ち此事實を謂へるものに外ならず」。と説くものにして、而して吾人は前に彼の「相乘説」を排して「總和説」を採用せると同じ理由に依り、此主張の大前提を誤謬なりとなすが故に、其結論も亦た之を拒否せんとするものたるなり。少しく之を詳言すれば、A・B・Cなる三種の生産物を齎らす一團の鐵の何れかの單位量がCなる生産物の有する八たる價値を受く可しと謂ふは眞なれども、同じ時に於て爾餘の單位量も亦た此價値を受く可しと謂ふは到底眞たる能はずして、是等は更に其何れかの一つがAなる生産物の有する一〇なる價値を受け、他の何れかの一つがBなる生産物の有する九なる價値を受くるもの

なりと謂はざる可からず、故に是等が實際に A・B・C なる生產物となりたる時に於ては、又た夫れ〳〵に一〇、九及八なる價値を有せざる可からずして、ウィザー氏の言ふが如く是等が共に八なる價値となるが如きことは斷じて有り得可からずとなすなり。

要之、ウィザー氏は同じ時に於てと云ふ根本的要件を常に忘却するよりして、層々階段的に置きて考ふ可きものを一樣に平面的に羅列して考ふるが故に、至る處に於て斯の如き誤謬に陷るものにして、實に又た吾人の深く鑑みざる可からざる所なりとす。

四

次に同じ理由を以てすれば、補足的財の價値の大さを、之が有無に因りて生ずる價値の差額に求めんとする、メンガーの說（カアルメンガー國民經濟學の基礎一四二頁參照）に對して下せるウィザー氏の非難の如きも、亦た甚だ理由に乏しきものとして撤回を迫らる可き性質のものたるは、左の引用を讀まむ人の直ちに首肯せらるゝ所なる可し。何となれば、ウィザー氏の此處に理由とする所が彼の誤れる相乘說に存するは一見極めて明瞭なればなり。

「假りに三個の生產的要素ありて、最も合理的なる生產計畫に之を使用する時は、互に相俟ちて其價値一〇なる大さに達する生產物を齎すとせよ。××××。

次に是等の三要素が最善以外の或計畫――是は彼等が別個の案配に於て互に結合せらるゝことを要求するものなるを記憶するを要す――に使用せらるると假定せよ。例へば其各が或る他の案配に從ひ別々に使用せらるゝに依りて、是等三個の案配の何れもの收益が三なる價値丈け增大せられ、從つて彼の三個の要素は此場合に於ては其價値九なる大さに達する收益を生ずるとせよ。

此場合に於て各個の要素の價値はメンガーの原則に從へば如何に計算せらるゝであらうか。其は即ち之を喪失せる場合に生ずる收益の減少に依りてゞある。此場合に於ては減少は一〇なる額に上る、――××××――然れども其中の六は殘餘の二要素を新たに使用するに依りて恢復せられ得。故に結局損失は四なる大さに達す。而かも此は三個の要素の何れに就て言ふも無差別に眞である。然れば三個を合せ取りたる其價値は十二である。併し此は有り得可からざることと

である、何となれば彼等は最も有利に使用せらるゝ時に於てすら一〇なる收益を與へ得るに過ぎないから」。「自然價値論英譯本八三頁）

但しウィザー氏が此點に關しメンガーの説を拒む其理由は單に此一事のみに存せずして他に別個の道理を有するに基くものなるは、ウィザー氏に公平ならんが爲め吾人の特に讀者の前に風聽し置かざる可からざる點にして、其當否は又た別に之を詮議せざる可らずとなすに躊躇せざる者なれども、併し其を此處に合せ説かんは本論の目的以外に逸出するものにして吾人當初の志にあらざるが故に、今は唯上記の缺點を指摘するに筆を止め置くものなりとす。

ロオドベルトスの地代論とリカルドオ（二、完）

小泉信三

五

賃子は上述の如くにして成立する。次に賃子は如何にして分れて資本利潤及び地代となるか。これが Rodbertus の分配論中最も重要な問題で、此に對する彼れの解答は最も特色あるものである。

今、Rodbertus に據れば、一社會に於て生じた賃子全額は二ッに分れて農業（嚴格に云へば原生産 Rohproduktion）と製造業 Fabrikation とに歸屬するが、原生産に歸屬する賃子の中から、原生産に投ぜられた資本に對する利潤を控除した殘餘が地代を構成するのであるから、地代の法則に達する爲めには先づ（一）一社會の賃子全額は如何なる割合で原生産と製造業とに分れ落ちるか、（二）資本利潤は如何にして定まるか、及び（Ricardo との相違を論ずる場合に最も大切な事は）農業に歸屬する賃子から農業資本に對する利潤を控除した跡には果して何物かゞ殘るべき理由がある